

第8回 WBSC 女子ワールドカップ(米国フロリダ)出場
田中 露朝さん(ライフマネジメント学科4年) インタビュー

—まずは、野球を始めたきっかけを教えてください。

父が地元の少年野球のコーチをしていた影響が大きいです。
2歳年上の兄が先に野球を始めたので、自分が小学校に入る前から父や兄とキャッチボールをしたりしていました。
地元の少年野球チームには小学校1年生から入り、自然な流れで自分も野球を始めたという感じです。

—野球をやる環境が整っていたということですね。

はい。4人兄弟、全員野球をやりました。野球一家です。

—じゃあ、もし野球をやっていなかったら何をやっていたと思いますか？

小さい頃はピアノをやりたいかったです。
スポーツではなくて音楽などの芸術に触れてみたかったです。

—家にピアノがありましたか？

おばあちゃんの家には大きなピアノがあって、いいなあと思っていました。

—小学校6年間野球を続け、そして中学校に上がる際、このまま野球を続けるかどうかなど、悩んだりしましたか？

野球をやめる気は全くなかったです。続けたいと思いました。
ただ、足を怪我していたので、地元のクラブチーム(硬式)に入るか、中学校の部活動で軟式野球をするか迷いました。
結果、中学校の部活動の軟式野球部に入りました。
男子の中に女子1人でしたが、小学校6年間、野球をずっと一緒にやってきた仲間がたくさんいたので全く問題はなかったです。
良い仲間恵まれました。

—中学校3年間の野球生活はどんな感じでしたか？

試合にはたくさん出場しましたか？

自分はピッチャーだけではなく、内外野も守れたので、試合には出場していました。
少年野球時代は、キャッチャー以外のオールラウンドプレイヤー的に何でもやっています。キャッチャーは絶対できません(笑)。

—そもそもピッチャーを志したのはいつ頃ですか？

小学校5年生頃だと思います。

早い球が投げられたことと、ピッチャーができる人が不足していたからだと記憶しています。

—本格的にピッチャーとなったのは高校に入ってからですか？

はい。高校1年生(福知山成美高校)からピッチャーメニューでトレーニングをしていました。

—福知山成美高校の時に、尚美OGである里さんがコーチでしたよね？

はい。1年生の時です。

めちゃくちゃ格好良い里さんに投げ方や変化球など、技術的なことをいろいろ教えていただきました。里さんもピッチャーだったので、とても憧れていました。

あと、里さんがプロに戻られた後、コーチとしていらしたお2人も尚美OGでした。柏崎美佳さん、今野めぐみさんです。

—田中さんが尚美に来てくれたのはこの3人のコーチの影響が大きいですか？

そうですね。実際にコーチに「尚美は成長できる」と薦められました。

あと、試合で尚美と対戦し負けたことも大きいです。

強い先輩がたくさんいる環境で学び、もっとうまくなりたいと思いました。

—尚美に入学、そして女子硬式野球部に入部してまず最初にどう思いました？

やはり先輩たちのレベルが高かったです。

みんなとても上手でした。

—そのような環境で1年生の時はすぐレギュラーになれましたか？

1年生の前半はほとんど試合では投げられなかったです。
先輩たちの姿をベンチから観察し、自分もレベルが高い球を投げたいと思いながらたくさん
ことを学びました。

—試合で投げられるようになるために、どんなことを努力しましたか？

先輩たちのピッチャー姿をベンチからひたすら観察して学びました。
それから1年生の頃は、西武ライオンズなどで活躍された偉大なピッチャーである新谷博監督
に教えてもらったこと全てを1つ1つ受け止めて実践しました。
それまでは、自分独自の投げ方、考え方でやっていました。

—その結果、新谷監督からの信頼を得ることに繋がり、2年生の秋頃には試合で投げるこ
とができたということですね。

1年生の後半から2年生になる頃には、投げさせてもらえるようになって結果も出せ
るようになりました。

—そして、前回のワールドカップの日本代表に大学2年生の時に初選出、続いて
今回の2回目の選出という形で努力してきたことが実を結びましたね。

無事に書類選考、実技テストを経て日本代表としてワールドカップへ行かせていただき
ました。

—では、2年生の時の初選出と今回の2回目、比べてみてどうですか？
気持ち的に何か変化はありましたか？

2年前の初選出の時は、自分も若かったし、偉大な先輩たちを前にしてただただ緊張していまし
た。先輩についていくのに精一杯でしたが、投げさせてもらえたりもしたので、初めての経験で、
いろいろな事を吸収する時間でした。
今回に関しては中堅の立場になったので、また違った緊張がありました。

—というと？

今回は自分よりも若い後輩、高校生が入ってきたので、言動に気を付けたり、後輩のお手本に

ならんくはという責任を感じました。

また、実際の試合でマウンドに立った時、緊張からくる足の震えが1回目のときより凄かったです。

—え！？ 1回目よりも？

はい。2回目ということで結果が求められていたので、プレッシャーを感じていたのだと思います。

でも、1回目はただただ緊張していましたが、2回目は試合を楽しむこともできました。

苦しい試合が続いたりもしましたが、野球の本場という凄い舞台で野球をすることができてめちゃくちゃ嬉しかったです。



—2回目のほうが緊張したというのは、なかなか聞けないお話ですね。

本当に貴重な経験をさせていただきました。

—田中さんは普段、チームのエースで、先発として登板することが多いですが、今回のワールドカップでは、抑え投手でしたよね？

はい。普段とは違う抑えも経験させてもらえてめちゃくちゃ良かったです。

先発とはまた違った緊張感があり、勉強になりました。

決勝では、6回から登板することになりましたが、先発の里選手が守ってきたリズムをくずせない、絶対に打たれたくないと強く思いました。



—結果、先発の里さんと田中さんで完封リレー6連覇達成。お見事でした！

緊張しましたが、本当に良かったです。



—少し話はズレますが、他では話していない、何か面白いエピソードはありますか？

とにかくチームメイト 20 人がとても仲が良かったです。

一人一人がとても面白い人ばかりで楽しかったです。

監督・コーチもとても楽しい方で、選手たちとの距離も近くチームに一体感が生まれました。

あと、私の背番号である 7 番に少し秘密があります。

実は高校時代の恩師である長野恵利子監督の代表時代の背番号が 7 番だったので、長野監督の 7 番がどうしても欲しい背番号でした。

「7番を背負ってワールドカップの舞台上で投げます」と約束をしました。

—それは感動的な美談ですね。

長野監督もとても喜んでくれたと思います。



—そして、田中さんは現在大学4年生ということで大学生活も残り少しくなりました。

4 年間、野球に勉強に頑張ってきたと思いますが、引退される前に大きな大会がありますね。

ワールドカップを終え一皮むけてパワーアップした田中さんとなった今、その大会に向けて何か特別にやっていることなどはありますか？

やることはいつもどおりです。

大学に来て練習をして、ピッチングして、監督に教えてもらったことを実践します。

試合だからといって特別なことはせず、普段どおりの自分で試合に臨みます。

あと、キャプテンもやっているの、チームメイトとのコミュニケーションは大事にして、チームが一つとなるようにいつも考えて行動しています。

—エースピッチャー、そしてキャプテンとしてチームの調整役も担っているのは正直大変ではないですか？

キャプテンの仕事でマネジメント力も学べたのでより成長できたと思います。

いろいろな問題をめげずに解決してきたことがチームの勝利につながっていると思います。

後輩たちに、この気持ちが伝わっていただければいいな・・・と思います。

—謙虚ですね。絶対伝わっていると思いますよ。後輩はそんな田中さんの背中を見ています。この経験は社会人になっても絶対に活かせますね。

—最後になりますが、将来の目標は何ですか？

とにかく身体が動くまで大好きな野球を続けたいです。

また、女子野球の認知度や競技人口が増えて、もっと発展して欲しいです。

私自身が女子野球をもっと盛り上げる活動をしていけたらと思います。





写真提供:全日本女子野球連盟

～インタビュー後記～

以上、帰国後大学のチーム練習に合流し、お疲れのところインタビューにご協力いただきました。

一つ一つの受け答えを丁寧に、気持ちを込めて回答していただき、何よりこれまでの経験に裏打ちされた「自信」や「オーラ」がにじみ出ていました。加えて、大きな瞳の奥に、後輩に対するやさしさと自分に対する厳しさが垣間見えました。

4年生となり、大学最後の大会を控え、「普段通り」の田中さんのピッチングを期待しています！また、これからの女子野球を盛り上げる「逸材」として、田中 露朝さんの活躍にぜひご注目ください！

聞き手:学生課国際交流室 仲、入試・広報課 山下